

奧吉野動物記

奧吉野動物記

斐太猪之介



朝日新聞社

著者紹介

斐太猪之介（ひだ・いのすけ） 本名井之丸喜久藏 明治四十四年飛騨古川に生る
昭和八年朝日新聞東京本社に入社 社会部
満洲・マレイ・スマトラ各地の特派員を経
て、終戦後帰国 現在大阪本社特信課勤務
著書「炉辺動物記」

ロケット・ブックス

奥吉野動物記

昭和32年1月20日発行

◎ 著者 斐太猪之介

発行者 浜名二正

印刷者 矢板東一郎

発行所 朝日新聞社

東京有楽町・小倉砂津
大阪中之島・名古屋広小路

定価 200 円

目次

オ
オ
カ
ミ
行
者

女 人 解 禁	サ ル の 宴 会 場	犬 蛇 窟 の 怪	オ オ カ ミ の 宿	竜 神 と 水 鳥	キ ツ ネ 落 し
------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	-----------------------

68 56 40 29 15 3

手長グマ物語

シカ泥棒

不思議な笹結び

蘇らぬ愛し児

北股の死闘

運命の出会い

大台ガ原夜話

凄じきサル智恵

カモシカ剣法

樫の実想夫恋

「死んだシシ」に追われた話

クモに騙された浮き山女魚

164 158 150 141 131

120 108 98 90 81

モチまき狸

171

日本オオカミは生きている

雪上の“狼印”

195

王者の風格

206

オオカミのシシ狩り

214

オオカミの子を拾った話

225

あとがき

238

才 才 力 三 行 者



キツネ落し

明治中期までは、日本の到る所に、野獣の楽天地があつた。

とりわけ、広大な原始の樹海に浮ぶ高原——大台ガ原山には、暖地を好むイノシシ、寒冷地のクマ、原野のシカ、岩場のカモシカ、そして、これらの野獣を追うオオカミ等が群れていた。

しかし、この野獣王国は、南西を高さ五百メートルから七百メートルもある豪壮な絶壁に囲まれ、東部と南部は、東ノ川、岩井谷、堂倉谷、大杉谷など、カモシカでなければ辿れないような、滝と断崖ばかりの魔の峡谷を縦横にめぐらしていた。

さらに、この山は、貿易風の来襲とともに九月ごろまでは、月のうち半分は、毒ガスのような濃霧に包まれるので、伯母ガ峯に住んで、大台へ入る者を捕えるという怪物「ひとつたたら」や、牛石ガ原の「ササ馬」——動く時は、体に生えているササが鳴るといわれる巨大な野馬——

—などの伝説を生んだのである。このため、すぐ目と鼻の先の大峯山が、千三百余年の昔、役の行者小角おすぬによって開かれているのに、大台ガ原山は、ついに明治の中期まで、暗黒地帯として残されていた。

もっとも、慶長十一年に高野聖が登って、牌七本を立てたという記録があり、その後も採薬使や画家数人が、この魔境を採ったと書き残されてはいるが、果してどこまで登ったものか知る由もない。

明治初期に、美濃の人実利行者じつかが、牛石ガ原に庵を結んだのが、まず本格的な峯入りの始まりで、続いて京都の興正寺関係者三人が、台地の入口に当る大和谷辺りで、水田を拓こうとしたが、稲が稔らないばかりか、余りにも恐しい濃霧に負けて、逃げ帰ったともいわれている。

明治二十三年の秋、大台ガ原山の北麓——北股谷きたまただの助四郎岩屋へ、長髪をたらし若い行者が杖を止めた。

上北山村方面から、飄然と流れてきた跣の乞食行者は、川上村の入之波しおの部落を廻ったが、誰も相手にする者がいないので、部落から歩いて三時間ほど奥の岩屋を仮りの宿としたのである。岩屋は、北股きたまたの流れを前にして、畳五枚も敷けそうほどの立派な岩穴であり、岩穴の周り

にはホトトギス草が、深山には珍しく、あでやかな紫鹿子の花を一面に咲かせていた。杣たちが、この岩屋の辺りを通ると、単衣の白衣を岩の上に脱ぎ棄てた行者が、身を切るように冷い流れへ入って、山神に祈りを捧げている姿がよくみられたが、水行を終った行者は、跣のまま、背負袋を背に、自然木の長い杖を手に、部落廻りに出るのが日課であった。

長髪を肩へたらしめた面長の顔は、陽に焼けて真黒ではあるが、筋の通った高い鼻が、鼻翼を張り、可愛らしい口もとに、ぐっと力が入っている。

草履もはかない足は、泥にまみれてはいるが、何とはなしに、育ちのよさを匂わせる姿は、間もなく里人の好感を呼び、あの部落でも、この部落でも「あれは、ただの乞食ではないぞ」と噂するようになった。

その日も、吉野川沿いに下った彼は、筏師や杣たちで賑う柏木の部落へ入り、

おん目はきりきり

おん面まっ赤で

えんやらやあと

ふんばったりやそわか

と、自作らしい陀羅尼を口誦みながら旧家らしく、土塀をめぐらしたとある家の門に立って、

喜捨を求めた。

経文を読みはじめると、前庭の苔むしたコメツガの古木の陰から、上品な老婦人が現われ仔細ありげに手招きで呼び入れた。

行者は、見事なスギランを植え敷いた庭の中の飛石を伝って、座敷の縁側へ近づいた。

壁も、柱も古色蒼然とはしているが、柱目正しい総ヒノキ造りの座敷は、森閑と静まり返り、八畳間の真中に敷かれた蒲団の上に、ポツンと人形のように坐っている娘の姿が目に入った。

行者はその顔をみつめた時、はッとして棒立ちになった。

丸い顔、豊かな頬、女にしては太い濃い眉毛、黒い大きな瞳、大きいめの口から、かすかに美しく揃った歯なみが覗いている。

誰かに似ている。懐しい顔だと、一目で近親感が湧き起ってくるのだが、それが誰だか、何んのためか分らなかつた。

その時、先ほどの老婦人が、手桶を提げてきて、行者に足を濯がせ、座敷へ招じ上げた。

その間、寝床に坐っている美しい娘は、庭の紅葉の方へ向いたまま、目一つ動かさなかつた。

「これは、孫娘で、美津と申します。

去年、奈良の金持から、ぜひ嫁にといわれましたが、それを嫌だ嫌だといっているうちに、

とうとうキツネつきになってしまいました。

奈良に住んでいる、これの父親は、京大阪までいって、名医という名医にみてもらいました。が……もう、まる一年にもなるのにこの始末でございませう。

何か食べさせようとすると、手を出さずに口を突き出すことがございます。

また、時には食べ物を部屋の角へ銜えていって、隠れて食べたります。

一番怖いのは、時々ネズミ鳴きしたり、それを捕えて食うキツネの真似をすることです。

行者さま、医者に見はなされたこの娘を、何とぞ神仏の力で救ってやって下さいまし。御恩は、どのようにしてもお返ししますほどに」

老婦人はこのように嘆願した。

行者は、老婦人の言葉が切り切らぬうちにずかずかと娘に近づくと、顔の前で、手の数珠を、三回ほど打ち振って、じっと、うつろな瞳をのぞき込んでいたが、

「いかにも、キツネつきのようすなあ。が、キツネつきは、心の病気ですよ。

実は、この私も、このような病気で、一時は霊のない人間になったのを、父が大峯山の山神に祈願して癒してくれたのです。

私は、いま、その山神へのお礼に、大台ガ原山を開こうと決心しているわけです。

キツネつきは、上北山村の方でも、幾人も癒して進ぜましたが、心配なさらなくてもきつと落してあげますよ」

と語って、水と塩を求め、身を清めた。

彼は、娘と向って坐り、その無表情な顔を両手ではさんで、自分の方へ向け直すと、可愛らしい両手を合掌させた上、自分も合掌して、経文を誦しはじめた。

読経の声は次第に熱をおび、荒々しい行者特有の調子になると、長髪をふり乱して、合掌した自分の手を震わしはじめた。

すると、どうしたことか、美津は目をつむり、行者の調子に合わせて、彼女の合掌した手を上下に動かし始めた。

行者が、体を震わすと、娘も体を震わせた。

行者が白衣をひるがえして、畳の上へ二尺も飛び上ると寝巻のすそを乱した美津が、まるで磁石に吸い寄せられる鉄片のように腰を浮かした。

こうして、ものの一時も、狂ったように体を動かしていた行者は、突然立ち膝になったかと思ふと、数珠を持った逞しい腕を振り上げて、大喝一声、娘の頭上で空を切った。

美津は、乱れた姿のまま畳の上へ、大の字に倒れて気絶した。

念仏を唱えていた老婦人が駆け寄ろうとしたが、行者は、それを手で制し、静かに般若経を誦しながら、娘を抱いて、蒲団の中へ入れてやった。

キツネ落しは、終ったのである。

老婦人は、早速、別室へ行者を導き、小女の運んできた酒や食事をすすめたが、行者はどれにも箸をつけずに、ソバ粉を所望した。

そして熱湯でかくべきソバ粉を、水でこねながら塩をふりかけて、うまそうに食べた。

それから

「えらいごちそうになりました。

娘さんは、静かに寝かせておけば、自然に目がさめますよ。

さめた時には、新しい心を神さまが入れ替えて下さっているはずです」

と簡単にいい残して、飄々しおのと入之波はの方へ姿を消した。

美津は、その日の夕方、行者のいった通りポツカリと「生きた目」を見開いて正気に返った。

奈良の両親の下から、京大阪まで医者を訪ねて歩いたことは、もちろん、いま、柏木の祖母

小野りゆうの下で、行者の祈祷をうけて癒ったことも記憶になかった。

記憶の断層については、美津も一まつの不安をもっているようであるが、他目には、目から鱗が落ちたように朗かな娘になった。

この噂は、たちまち川上村に拡がった。この寒む空に、毎朝水行し、単衣の白衣で、かぜ一つひかないのは、ただ者ではないと思つたとか、あるいは那智へ去つた実利行者じゆりかが、身代りを寄こしたのだとか、里人は、いまさらのように騒ぎ出した。

原始林は、重厚なあや錦の衣を脱いで、枯淡な冬姿に変わりつつあつた。

北股きたまたの柚道では、茶褐色になつた落葉が、時には群雀のように峡谷の空へ舞い上り、時には、道が分らなくなるほど降りそそいだ。

川原の野イバラが、サンゴのように赤いつややかな実を、辺り一面に輝かせている陽当りで、流れから上つた行者が、体を拭いていると、岩屋の方で

「行者さまあ、行者さまあ」

と呼ぶ声が聞えた。

いつもの杣たちがきているのかと思つて、崖を上つてみると、カスリの着物に、カスリのモ

ンペをはいた美津が、年寄りの下男を連れて立っていた。

「柏木の娘さんか、元氣になりましたか」

と焚火の傍へいざなった。

しかし、美津は山グミよりも真赤になって何度も何度も頭を下げるだけで、何もいわないの
で、たまりかねたように爺さんが口を開き

「美津さまは、あれから精神修養をやらねばと、一途に思い詰められましたんや。

それで、どないしても行者さまの弟子になりたいいわはりましてなあ。

じゃが、そればかりは、行者さまの修業のじゃまになるからと止めましたんやが、もう美
津さま」

老人は、恥ずかしそうに枯枝を、無心に折り刻みながら横を向いている美津の顔を、笑いながらのぞき込んだ。そして

「行者さまは、やがて大台で御修業やと聞いとりますが、そんな時は、せめて、この美津さまが縫いなされた白衣を身につけて戴きたいもんやというわけで、いまお願いに上ったようなわけ
でございますんで……」

と、背負ってきた荷物の中から、ウコンのふろしき包みを取り出して、行者の前へ差出した。